第６章　昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査

浜崎　一志

本章では京都市左京区所在の京都大学吉田キャンパスにおいて，昭和56年１月から昭和57年３月までに実施した試掘・立合調査について報告する。試掘調査は６件で総面積は，158㎡，諸配管埋設工事立合調査が６件，建物新営工事立合調査が６件，道路造成工事立合調査が１件であった。以上の調査結果を，北部構内，本部構内，教養部・医学部・病院構内の３地域にわけて説明する。

１　北部構内（京都市左京区北白川追分町・北白川西町，図29・30）

農学部熱帯農学科校舎新営予定地（103），農学部附属農薬研究施設増築予定地（104），北部構内実験排水槽設置予定地（105）の試掘調査がおもなものである。このうち，105地点の試掘調査については，この結果にもとづいて昭和56年７月より実施した発掘調査とともに第４章で報告したので，本章ではふれない。

103地点の試掘調査　103地点の地表は，ほぼ水平であったが，これは旧農学部本館撤去後の造成によるものである。試掘溝４および試掘坑５は旧本館基礎撤去工事により黄砂層まで攪乱されていたが，他の試掘坑は，ほとんど攪乱を受けておらず，層位も互いによく対応した。ここでは試掘溝３と試掘坑６の壁面層位図を用いて，103地点の層位について説明する（図30）。第１層は最近の盛土。第２層は旧本館新営（大正12年）の際の造成による盛土である。第３層（黄赤褐色土Ⅰ），第５層（黄赤褐色土Ⅱ）は明治時代ごろの耕土層であり，第４層（砂礫），第６層（黄白色砂）は小川の氾濫層である。この小川は下層のＳＤ１やＳＤ２の流れを踏襲するものであろう。第６層からは近世陶磁器とともに文久永寶（1863年初鋳）が出土した。第７層（青灰色土）は近世の耕土である。この耕土層は試掘坑６の西壁（図30左）で約40cmの段差

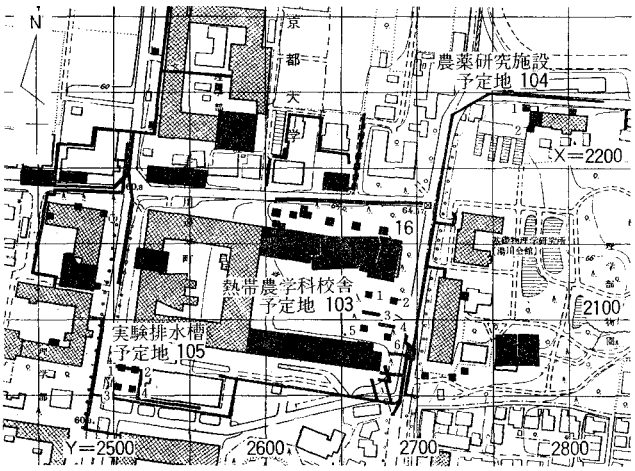

図29　北部構内の調査位置　縮尺1/5,000

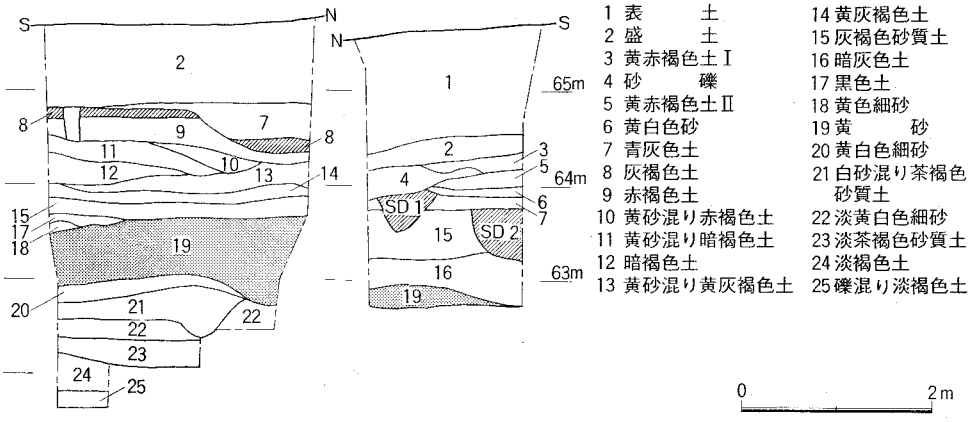

図30　北部構内試掘調査の層位(左　103-6，右　103-3)　縮尺1/80

が観察されるほか，試掘溝3と試掘坑6の間にも約50cmの段差が存在する可能性があり，南から北に下がる棚田があったと思われる。103地点の北に隣接する16地点の調査では，北から南に下がる棚田を検出しており，103地点の北寄り部分は谷状にくぼんでいたと思われる。ＳＤ１・ＳＤ２は，こうした棚田に水を供給する水路のひとつであったのだろう。第9層(赤褐色土)は中世～近世の遺物を，第11層(黄砂混り暗褐色土)は中世京都Ⅲ期の土師器を含む。第12層(暗褐色土)は平安京Ⅱ期の土師器杯(Ⅴ１)を含み，第15層(灰褐色砂質土)は9～10世紀ごろの黒色土器杯Ｂや緑釉の壺(Ⅴ２)を含む(図33)。第19層は白川の堆積による黄砂層であるが，この層も第7層と同様に南から北に下がる。近世の谷状地形は，この黄砂上面の地形を踏襲しているものであろう。第20層から第23層は無遺物層であったが，第24層(淡褐色土)の上面から，縄文晩期(滋賀里Ⅳ)の深鉢の丸底部が坐った状態で出土した。16地点では集石と滋賀里Ⅳに相当する甕をともなった縄文晩期の土壙墓を検出している。16地点同様，103地点にも，縄文晩期の集石や土壙墓が存在する可能性が高い。

104地点の試掘調査　104地点は東から西へ緩やかに下がる。標高は約67ｍで，京都大学吉田キャンパス内で最も高い所に位置する。試掘調査は2ヶ所に試掘坑を掘削しておこなったが，近世以外の遺物はほとんど出土しなかった。しかし，104地点と約50ｍしか離れていない8地点(図版1)の調査で，平安後期の瓦溜が検出されており〔京大埋文研78ｂ〕，増築工事の際に立合調査を実施した。その結果，104地点は東から西へ下がる棚田の段の下にあたり，古代・中世の遺物包含層は削平されていたことが判明した。

2　本部構内(京都市左京区吉田本町，図31)

本年度は本部構内で発掘調査がなかったが，前年度から引続き実施した本部構内実験排水管埋設工事等の立合調査により，近世の道路や中世の土器溜の貴重な資料を得ることができたので，従来の成果とあわせてここに報告する。

道路造成工事のA地点の立合調査と実験排水管埋設工事のC地点の立合調査により，近世の白川道および中世の白川道を検出した。A地点では現在の東大路通りの歩道とほぼ同じ高さで，幅1.4mにわたり近世の白川道を検出したが，その全幅は攪乱のため確認しえなかった。C地点では幅約3.2mの近世の白川道(第2章SF1)と，それに平行する流路(SD18・SD20)，および中世の白川道(SF2)を5.3mにわたり検出した。この両地点の調査結果と，B地点〔泉・浜崎81 p.39〕，57地点〔岡田・吉野80 pp.21-30〕，90地点(第2章)の調査結果から，近世の白川道の経路を復原した(図32)。吉田神社表参道から白川道に至る南北路は，D地点の立合調査〔泉・浜崎81 p.39〕と75地点の発掘調査〔五十川81 pp.23-24〕の結果から復原した。なお，近世道路については，第Ⅱ部第1章で吉田社周辺の景観復原を試みているため，これを参照されたい。

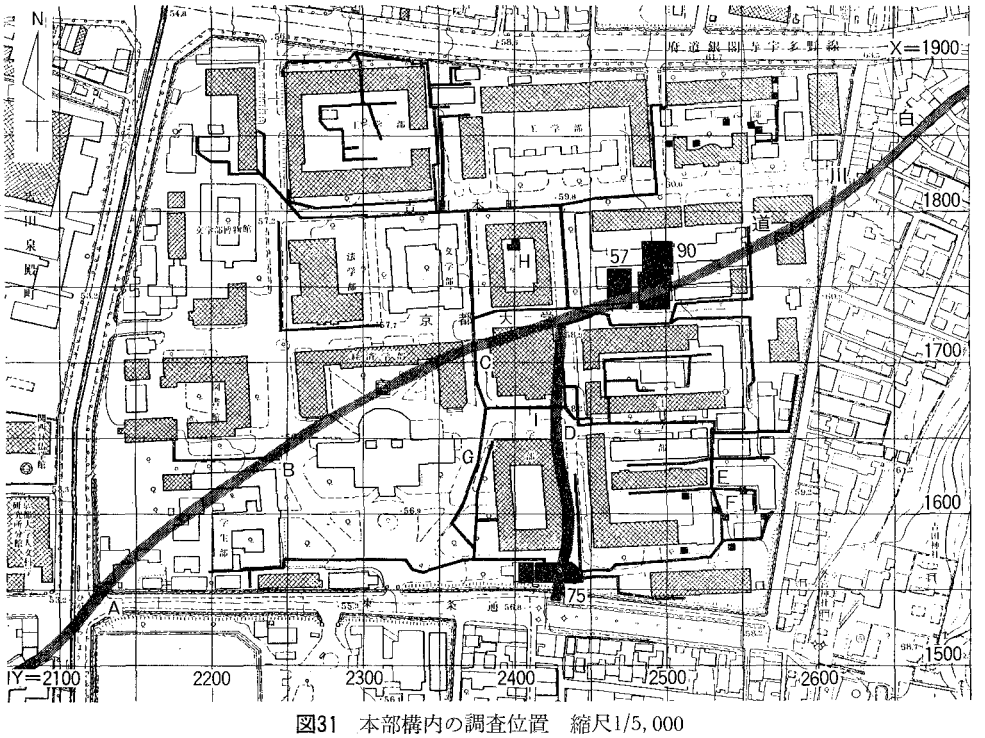

図31　本部構内の調査位置　縮尺1/5,000

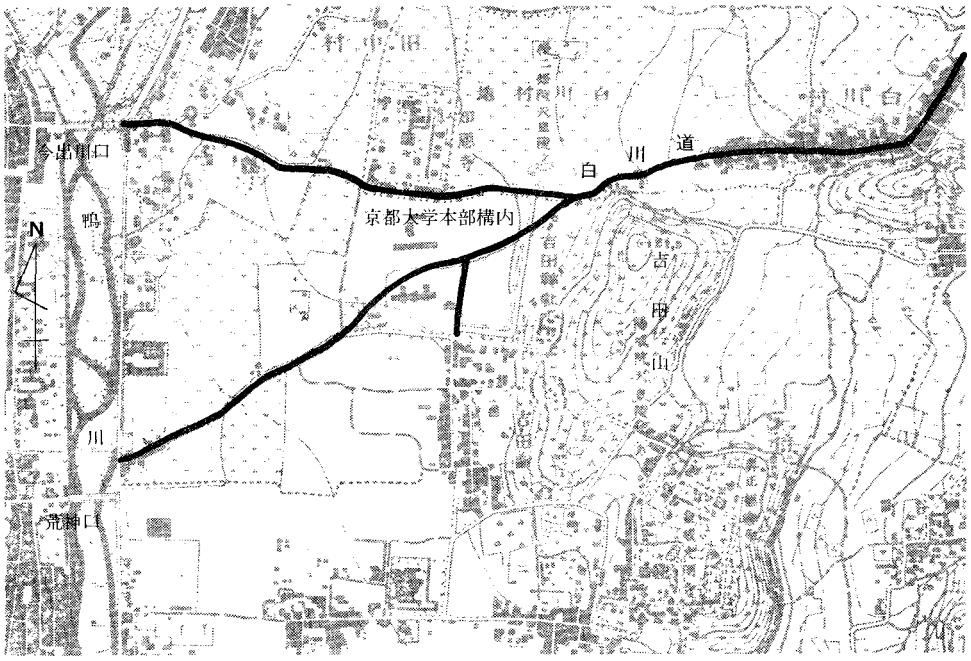

図32　近世の道路(明治25年仮製２万分１地形図から作成)

E地点では中世の土器溜を，F地点では中世の土坑を検出した。E地点の土器溜は，東西幅2.0m，深さ0.2mであったが，南北幅は確認できなかった。この土器溜からは大量の土師器と，須恵器すり鉢，瓦が出土した。これらの遺物の出土状況や，土師器の形態は，90地点のSK51(第２章)に似ている。V３～V11はE地点土器溜出土の土師器である(図33)。いずれも口縁部に１段の撫でと面取りを施す。V５は灰白色の椀の最も古い形態のものである。こうした椀を小量含むことからも，SK51と同じく中世京都Ⅰ期中段階のものと思われる。F地点では土師器小片を含む大土坑を検出した。大土坑は南北６mにわたって検出された。これは，70地点の試掘調査の際に，TP６で検出した，深さ２m以上にもおよぶ土坑の続きである〔岡田ほか80 p.40〕。この大土坑も，E地点の土器溜とほぼ同時期のものである。本部構内で検出した中世京都Ⅰ期の遺構は，以上のほかに71地点で検出されたSK１・SD１〔泉・浜崎81 pp.40-41〕があるが，検出例は，いずれも本部構内東半に集中している。SK51，E地点の土器溜のように大量の遺物の出土する特異な遺構の存在も，当時の本部構内一帯の地域の実態を考察するうえで注目すべき現象といえよう。

G地点では黄白色砂層を切る白砂層を検出した。この白砂層は北東から南西にはしる河川の埋土である。その本来の幅は不明であるが，検出幅は約25mおよび，深さは0.6m

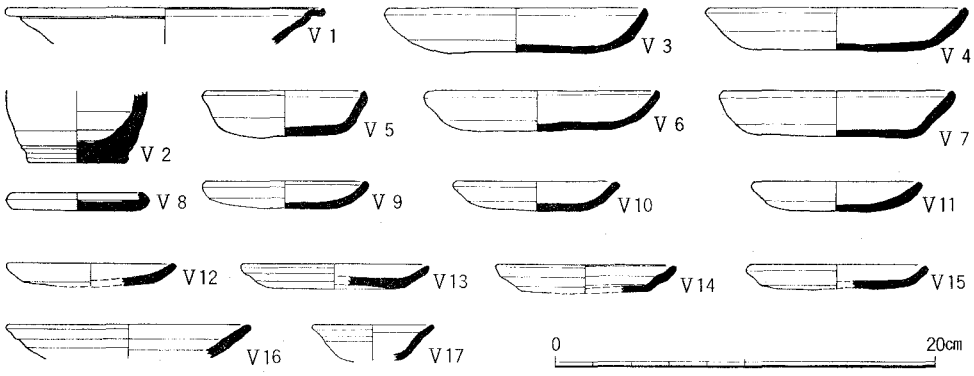

図33　北部構内103地点第12層出土遺物（Ⅴ１土師器，Ⅴ２緑釉陶器），本部構内Ｅ地点土器溜出土遺物（Ⅴ３～Ⅴ11土師器），医学部構内106・107地点出土遺物（Ⅴ12～Ⅴ17土師器）

であった。弥生前期末から中期初頭に埋積した黄砂層より下位にあり，それ以前に埋積した流路と考えられる。Ｈ地点では，75地点検出の溝ＳＤ３〔五十川81 pp.27-28〕の続きと思われる溝を検出した。この溝はＩ地点立合調査でも確認しており〔泉・浜崎81 p.41〕，75地点では，土取り穴と墓地を区画する境界となっていた。北への連続部分が，等高線を斜めに横切って，まっすぐ延びることからも，13世紀ごろのこの地域の境界を示す重要な遺構と考えられる。

3　教養部・医学部・病院構内（京都市左京区吉田二本松町・吉田近衛町・吉田橋町・聖護院川原町，図34・35）

放射性同位元素総合センター増築予定地（106-１～４），放射線生物研究センター新営予定地（107-５～８），医学部附属病院産科病棟ドライエリア増設予定地（108-１～４）の試掘調査と，教養部構内実験排水管埋設工事（120）および医学部構内実験排水管埋設工事（120）の立合調査がおもなものである。

106・107地点の試掘調査　放射線生物研究センターと放射性同位元素総合センターの新営・増築が隣接する敷地に計画されたため，一括して試掘調査を実施した。106・107地点の地表は緩やかに北から南へ下がり，その標高は51.5～52.0ｍをはかる。試掘坑６では激しい攪乱層を検出したのみであるが，試掘坑１～４・７・８で中世の土坑を，試掘坑５では弥生時代のものと考えられる溝を検出した。この地点の層位は以下のとおりである（図34）。第１層は表土。第２層（シルト混り灰褐色土）と第３層（暗褐色土）は無遺物層であったが，第４層（赤褐色土），第５層（茶褐色土）からは13～14世紀の土師器皿や内面に櫛描き雷光文のある同安窯系青磁椀が出土した（図33）。第６層～第９層は不定形土坑の埋土であ

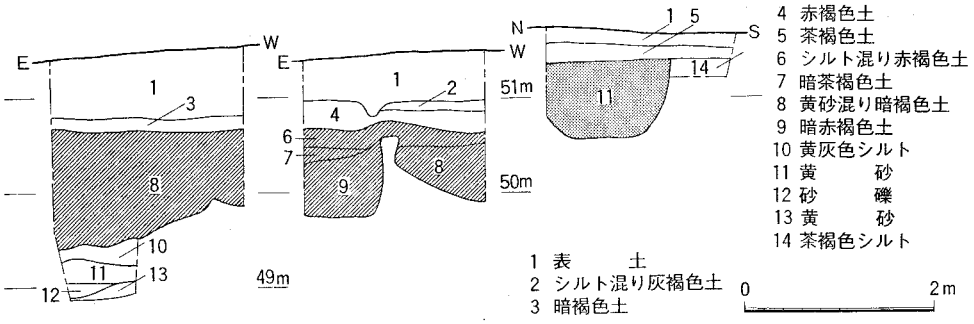

図34　医学部構内試掘調査の層位(左107-7，中106-4，右107-5)　縮尺1/80

る。こうした不定形土坑は，本調査区の北約100ｍの74地点でも多数検出しており，粘土を採取した跡と考えられている〔清水・吉野81 p. 15〕。本調査区の不定形土坑もこれらと一連の遺構であろう。ただし，これらの不定形土坑は，西側の41地点や東側の73地点および91地点には，まったく存在しない。不定形土坑の分布する範囲は医学部東半部に限られるようである。こうした現象は，74地点から106・107地点にかけての一帯が13世紀頃には粘土を採取してもさしつかえのない状態であったことを示唆する。12世紀末から14世紀初

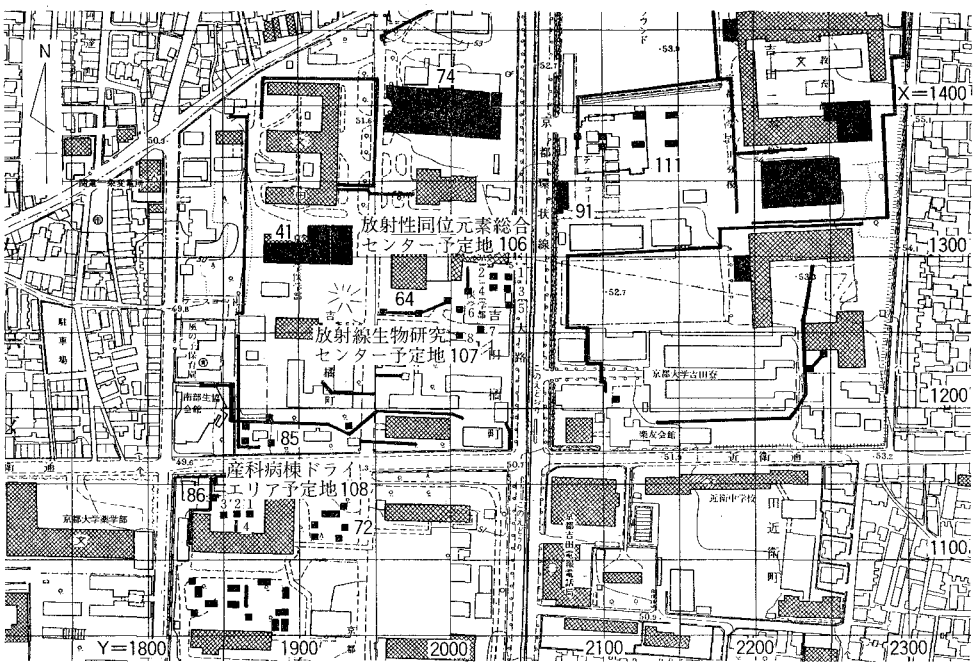

図35　教養部・医学部・病院構内の調査位置　縮尺1/5,000

頭にかけて，106・107地点を含む医学部構内から教養部構内西半部一帯には，藤原北家勧修寺家の流れをくむ吉田経房一族の吉田南亭や浄蓮華院があったと考えている（第Ⅱ部第1章）。こうした吉田氏の邸宅や菩提寺の占地を考察していくうえで，注目に値する現象である。第10層は採取の対象となった黄灰色シルトである。試掘坑5で幅1.3m，検出面からの深さが0.8m，断面がU字状をなし，北東から南西にはしる溝を検出した。溝の埋土の黄砂（第11層）は，弥生前期末から中期初頭にかけて埋積したもので，この溝は弥生前期以前のものと考えられる。現在発掘中の111地点では本調査地にむかってまっすぐ延びると想定できる弥生前期の溝を，40mにわたって検出している。この溝も，黄砂を埋土とし，断面がU字状をなすことから，同一の溝である可能性が高い。したがって，試掘坑5で検出した溝を，弥生前期のものと考えてよかろう。なお，本調査区のすぐ西側の64地点では，弥生後期の壺・甕が出土している〔京大埋文研80 p.5〕。以上のような結果から本調査地には，弥生時代においては111地点と，また中世においては74地点と連続する遺構の存在を確認することができた。

108地点の試掘調査　108地点の地表はほぼ水平で，標高約50.1mをはかる。調査は試掘坑1～3と試掘溝4を設けて実施した。しかし，すぐ北側の85地点の試掘調査同様，遺物は出土せず，遺構も検出されず，地山の赤褐色砂礫を確認して調査を終了した。

医学部・病院構内では，平安後期以後の遺構が多数検出される地域と，古代・中世の遺構がまったく検出されない地域がある。後者は医学部構内西南部と，108地点をふくむ病院東構内西北部，病院西構内の東南部をのぞく全域がこれにあたり，中世までは高野川・鴨川の氾濫原であったと考えている。